

## 幼稚園での体験からの学び：幼児によるカメの飼育 と気温の理解について

前田, 志津子  
活水女子大学健康生活学部

<https://doi.org/10.15017/26725>

---

出版情報：生活体験学習研究. 12, pp.25-33, 2012-01-20. 日本生活体験学習学会  
バージョン：  
権利関係：

# 幼稚園での体験からの学び

## 幼児によるカメの飼育と気温の理解について

前 田 志津子\*

## Learning through Experiences in the Kindergarten

### Raising Tortoises by young children and Understanding on Temperature

Maeda Shizuko\*

#### 1 はじめに

「いのちの教育」を飼育動物との関わりを通して行った小学校での実践事例は、これまで数多く報告されている。幼児教育においても「幼稚園における道徳性の芽生えを培うための事例集」(文部科学省)の中に、幼児のいのちの理解を培う実践例が報告されている。この実践例は、園で飼育しているカメにミミズを餌として与えることにより、幼児が生命とのかかわり方や、それに対する友達の様々な考え方を知って、生命についてより深く考え、「生命の大切さに気付く(5歳児)」というものである。この背景には、「幼稚園教育要領」(保育内容「環境」)に記されている「身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ」「身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする」というねらいと、「身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする」というねらいがある。このねらいを教師(保育者)が日々の幼児教育(保育)の場面で具体化するには、文章の真意をよく理解しておく必要がある。「身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ」というのは、その時だけ面白いような一過性の態度や行動が期待されてい

るわけではない。飼育動物の生態や飼育動物の生態に影響を与える環境への、より積極的、持続的な、後の知識の獲得につながるような興味・関心の育成が期待されているのである。また、「身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付く」ということは、幼児が単に小動物を自分のおもちゃやペットのように取り扱うことではない。その生態をよく理解し、慈しむ気持ちをもつ子どもに育てることであろう。

本研究は、筆者が担当した幼稚園の子ども達がカメの生態と環境、特に気温との関係を理解するようになっていくまでの過程をみた実践研究である。

幼児期は周囲の環境とのやりとりを通し、様々なものごとに対する情緒的理解を深めると同時に、それを基盤に科学的理解、知識の獲得につながる学習を行っていくものと考えられる。なお、筆者がここで言う情緒的理解とは、自然や動植物を愛し、大切にしようとする気持ち、優しさや思いやる気持ちをもって周囲の環境に関わろうとする意識・態度を意味している。また、科学的理解とは、事物の特徴、性質、変化等に気付き、興味・関心・好奇心をもって積極的に環境と関わり、より深く考えようとする意識・態度を意味している。

\*連絡・別刷り請求先 (Corresponding author)

活水女子大学健康生活学部 (〒850-8515 長崎市東山手町1-50)

Kwassui Women's University (1-50 Higashiyamate-machi Nagasaki-city, Japan)

## 2 研究の方法

### (1) 対象園

F県F幼稚園は、大学の附属幼稚園である。地方都市の住宅地にあり、大学のキャンパスと隣接している。入園は、保護者による送り迎えが30分以内でできることが条件である。園の創立当時は、徒歩での通園が想定されていた。しかし、今ではそのほとんどは車での送り迎えになってきている。入園に際しては、知的能力や生活能力をみるような特別な選考は一切行っていない。入園希望者が定員を超える場合は、抽選により入園の可否を決定した。園庭は豊かな自然環境に恵まれ、起伏のある広場や木々を利用した遊び空間がある。子ども達は季節の草花や虫を身近に感じ、それらを利用した遊びの楽しさを体験することが日常的にできる。なお、園庭では、ウサギとニワトリも飼育されている。

### (2) 対象クラス

4歳児クラス(24名)～5歳児クラス(27名)の2年間。筆者は、この2年間、クラス担任として子ども達に関わった。子ども達は、園庭での戸外遊びでは非常に活発であった。しかし、室内での課題的活動、クラス集会等では、友達や教師の話聞くことが苦手である。

### (3) 指導の原則

筆者は、日々の保育の実践にあたって次のことを心がけた。

#### 自発的な活動の重視

指示されるだけでなく、年齢相応に自分で考え、自分で判断し、自分で行動することができるようにすること。

#### コミュニケーション力の重視

教師や友達の話をしっかり聞くことができると同時に自分の気持ち、自分の考え、自分の疑問を積極的に表現できるようにすること。

#### 友達関係の広がり重視

遊びや様々な活動を通して友達と体験を共有し、積極的に豊かな友達関係をもつことができるようにすること。

#### 創造的に思考する力の重視

自然の変化に対する思考力や創造力の素地を伸

ばすとともに、知的好奇心を育み探究心を深めるようにすること。

### (4) 分析の視点

子ども達のカメとの関わりの様子について観察記録した資料を情緒的理解と科学的理解の視点から分析する。

## 3 実践「カメとのかかわり」

### (1) 実践が生れた背景

F幼稚園にあるカメの飼育ケースは遊戯室出入口の向かいの壁側に設置されていた。ある日ホールから出てきた5歳の男児がいたずらでカメのいる飼育ケースを割ってしまった。この出来事からカメの存在を子ども達に知らせていなかったことや、子ども達とカメとの関わりが希薄だったことを筆者は反省した。そこで、4歳児保育室出入口横に飼育ケースを移し、幼児がカメと関わりやすい環境をつくることとした。(図1)

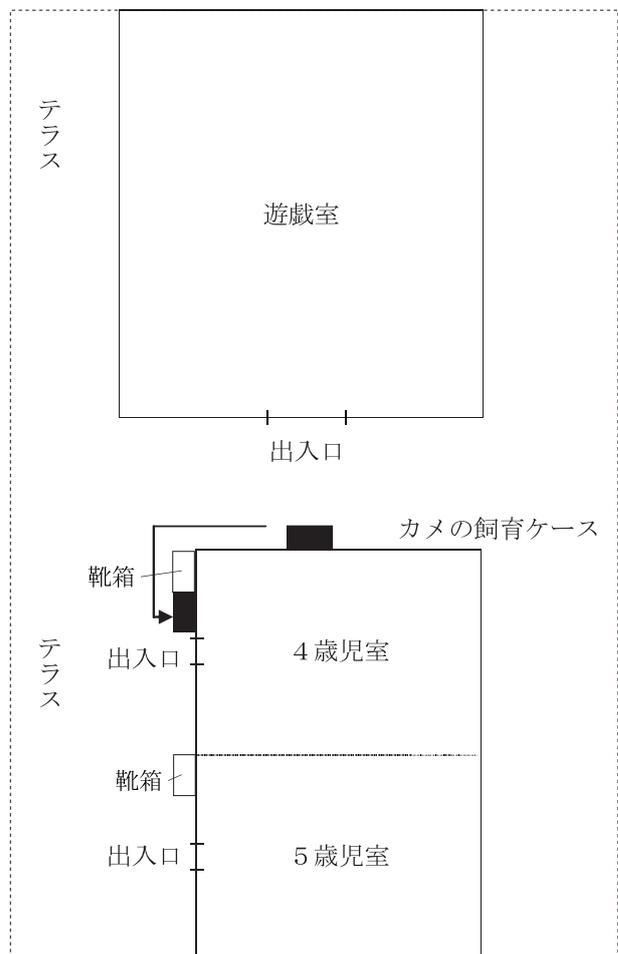


図1

表1 4歳児1学期の子どもの姿

幼児の言動	情緒的理解 科学的理解	環境構成と教師の援助	解 釈
登園すると必ずカメをみている。 「おはよう。」とカメに向かって声をかける。  カメに名前をつけようとする幼児がいる。  温度計を見ようとする。		・カメの飼育ケースは幼児の目に止まる場所に設置、登園時靴を履き替える靴箱の横(保育室出入口横)に設置する。  ・気温に興味をもたせるために幼児の目に止まる場所カメの飼育ケースの横の柱に温度計を掛ける。	・カメの飼育ケースを子ども達の目につく場所に設置したことは、毎日子どもがカメを見ることができるようになった。  ・カメに声をかけたり餌を与えたりするようになった。また自分なりの名前をつける姿のなかにカメに親しみをもち始めている姿がみられる。  ・温度計を掛けたのは、プール遊びが始まり気温や水温について話をしたことからであったが、温度計をカメの飼育ケースの側に掛けたことが幼児の温度計への興味を引いた。

(2) 実践経過

カメと関わる幼児の意識や行動の変化を4歳児1学期から5歳児3学期までの2年間について学期ごとに表1から表6に示す。なお、表中の は情緒的理解と判断される幼児の言動を、 印は科学的理解と判断される言動を表している。

4歳1学期

表1は、4歳児クラス1学期の子ども達の様子を時系列に沿って示したものである。

新年度に入って、4歳児クラスの保育室の前にカメの飼育ケースを移動させ、カメが子ども達の目につきやすいようにした。その結果、子ども達はカメに餌を与えたり、声をかけるなど以前よりカメと関わる姿がよく見られるようになった。このことから子ども達はカメに親しみをもつようになったとみてよいであろう。なお、この頃、筆者はカメの飼育ケースの横に温度計を掛けた。温度計を掛けたのは、プール遊びが始まり気温や水温について子ども達に話したのがきっかけであった。

4歳児2学期

表2は、2学期の子ども達の様子を示したものである。

2学期に入ると、子ども達は温度計を単に見ることから、温度計の目盛りを数え、気温に関心を持つようになってきた。しかし、ここではまだ気温とカメの生態の関係については気付いていない。

4歳児の10月になると、カメは子ども達が餌を与



写真1 温度計の目盛りを数える子ども

えるとすぐ食べてしまい、再度与えるとその餌も食べてしまうようになった。食べる量が明らかに増えたのである。子ども達は、こうした観察体験からカメの動きの変化に気付いたようである。カメは、その後餌を与えてもほとんど食べなくなり、次第に動きも鈍くなっていった。この状況を見て、子ども達はカメの健康を心配した。この頃、筆者は子ども達に「ふゆじたく」という歌を教え、よく一緒に歌っていた。歌に出てくるのは動物達の「ふゆじたく」すなわち冬ごもりの準備についてである。子ども達は、この歌がきっかけになり、「カメも冬眠したいのかもしれない。」と考えるようになった。そして、みんなでカメの冬じたくをしてやることになる。

冬じたくをしながら、カメはしばらく葉っぱの布団の中で眠ってしまうので、忘れないようにと、自ら子ども達はカメの絵を描こうということになる。その過程で「脚はどうなっているかな?」「カメはオスかな?メスかな?」と疑問をもつ子どもがでて

表2 4歳児2学期の子どもの姿

幼児の言動 情緒的理解 科学的理解	環境構成と教師の援助	解 釈
<p>教師と一緒にカメをタライに移し散歩させたり、水槽を洗ったりする。</p> <p>温度計の目盛りを指で押さえて数えようとする。</p> <p>温度計の目盛りを数えながら「20キ口？」と呟く。</p> <p>「朝食べたのに、また食べる。」「よく食べるね。」と餌を与える回数が多いことを感じる。</p> <p>カメの動きの変化に気付く。「餌を食べなくなってきた。」「あまり動かない。」これまで餌をよく食べていたが、食べなくなってきたことや動かなくなってきたことを知る。</p> <p>温度計の目盛りを指して読もうとする。</p> <p>カメを教師と一緒に冬眠させる準備をする。「葉っぱのおふとん」と歌にあるように落ち葉を集めてカメの布団にする。</p> <p>カメを忘れないようにと、自分達からカメの絵を描く。</p> <p>「脚はどうなっているかな？」「オスかな？メスかな？」「オスとメスはどこでわかるのかな？」と疑問をもつ幼児もいる。</p> <p>「みみちゃん」と自分なりの名前を付けている</p> <p>「10うど」と記す。しかし「ど」は鏡文字になっている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・カメの動き方がよくみえるようにテラスに放す。</li> <li>・カメの歩く様子を見せたり、手で持ち上げたりして教師はカメに触れてみせる。</li> <li>・幼児の言葉を聞き、訂正するのではなく、「20度だね。」と正しい単位で応える。</li> <li>・「そうだね。」と幼児の思いに共感を示す。</li> <li>・冬眠する動物が登場する「ふゆじたく」の歌を伝え、一緒に歌う。</li> <li>・学級全体でカメの名前を決めるのではなく、各自の思いに任せる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幼児は温度計をみることから、温度計の目盛りを数える姿に変わり、気温に関心をもつようになってきた。ここではまだ気温とカメの関係についてはみえてこない。</li> <li>・「何キ口」と言っていることから単位の使い方は分かっていない。しかし、気温を読もうとする意欲が伺える。</li> <li>・10月に入り、カメは餌を与えても直ぐに食べてしまうことから、幼児はカメが食べる餌の量の多さに驚いたので、教師もそれを受け止めカメ冬眠に入る前の様子を予感する力を認め、今後の幼児の反応に注目することが重要であると考えた。</li> <li>・カメの動きの変化に子ども達は気付き、カメの健康を心配するが、「ふゆじたく」の歌の内容とカメの冬眠につながることを理解した。</li> <li>・冬眠するカメの生態に関心をもつ幼児をさらに注目すべきその時期に達していると考えられる。</li> <li>・冬眠するカメの生態に関心をもつ幼児に教師が注目しながら今後の保育を展開することが重要。</li> <li>・自分達からカメの絵を描く姿は真に描きたいから描くという主体的な行動である。</li> <li>・カメの動きと気温との関係を感じている。</li> <li>・S児は「10度」を「10うど」という音に聞こえるのであろう。</li> <li>・カメと温度計を表現することは、カメとの関係を意識して捉えている。</li> </ul>

くる。すると、ある男児が「メスは首のところに黄色の線がある。」と言う。そのことから改めて、皆で雌雄の区別について調べてみた。その結果、オスは全体の色が黒っぽく、メスよりも小型であり、爪が長い、尻尾の部分が長いということが分った。結局、子ども達が関わっているカメはオスであろうと

いうことになった。

子ども達が描いた絵を見ると、多くの子どもが飼育ケースの中のカメと飼育ケースの横の温度計を描いている。しかも「10うど」と文字を書いている子どもさえいた。こうしたことから、子ども達は、カメの生態の変化と気温の関係について気付き始めた



写真2 忘れないように絵を描こうと考える子ども



写真3 冬眠と気温の関係を知りつつある。



写真4 カメに自分なりの名前を付けている

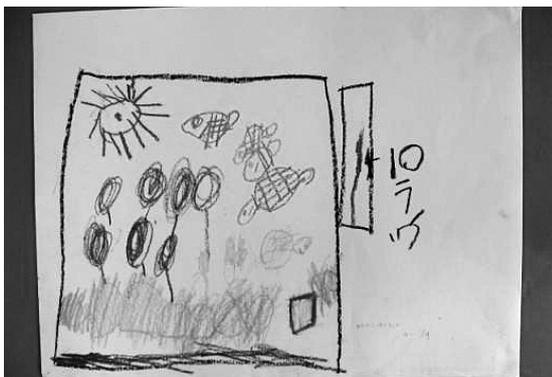


写真5 冬眠時の気温10

ものと推測される。

#### 4 歳児 3 学期

表3は、4歳児3学期の子ども達の様子を示したものである。

子ども達は、冬眠中のカメを見守り続けることによって、カメが何も食べず、動かないことに気付く。そして、「もしかすると死んでいるかもしれない」と心配しながらも、根気強く待った。そして、その間も毎日温度計を見、そのなかで日々の気温の差を客観的に読み取る姿が見られるようになっていった。

#### 5 歳児 1 学期

表4は、5歳児1学期の子ども達の様子を示したものである。

さらに年度が移り、子ども達は5歳児クラス（年長）に進級した。そして、4月の終わりに、動き出すカメに気付いた。この時、子ども達は気温が「20度」であることを確かめ合った。しかし、20度を示す日は以前にもあった。このことについて、なぜそのときは動かなかったのか、同じ20度でもカメが目覚めた20度とどこが違うのか、疑問をもつ子どももいた。カメの冬眠からの目覚めには、気温だけではなく他の条件（日差し等）も関係しているのではないかと考えているようである。

カメが目覚め、息を吹き返したかのように動き出すのを見て子ども達は強く感動し、非常に喜んだ。カメの飼育ケースを自分達できれいに洗い、カメにとって住み心地のよい環境となるようにした。その様子には、カメに対する子ども達の深い愛情をみることができる。

#### 5 歳児 2 学期

表5は5歳児2学期の子ども達の様子を示したものである。

9月の終わり「暑い、暑い。」と言いながら「いったい何度あるのか。」と一人の幼児がつぶやいた。この言葉を聞き、筆者は、温度計の横に紙を貼り、「32」と記入した。気温を記録する環境をつくってみたのである。最初は筆者が気温の数字を書いていたが、しだいに登園した子ども達が記入するようにならなくなっていった。記入した子どもが「今日は 度

表3 4歳児3学期の子どもの姿

幼児の言動 情緒的理解 科学的理解	環境構成と教師の援助	解 釈
<p>子ども達は登園すると飼育ケースをみている。「まだ寝ているのかな?」「動かないね。」「どこに隠れて寝ているのかな。」とつぶやく。</p> <p>カメがいつでも水を飲むことができるように、きれいな水に替える。「水も飲んでいない。」「何も食べていない。」「死んでいないのかな?」と心配する。カメを見ようとする幼児に、「まだ待ってよ。」と制止を促す幼児がいる。</p> <p>冬眠しているカメの飼育ケースを覗きながら「今日は何度かな?」と言いながら温度計をみている。</p> <p>「13度。」</p> <p>「昨日は15度だったよね。」と、友達に確認を求める姿がみられる。</p> <p>「15度より13度の方が寒いよね。」と友達に共感を求める姿がみられる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・冬眠中のカメの世話として、いつでもきれいな水が飲めるように子ども達と一緒に水を替える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・カメ自体の姿は直接見えないが、飲み水が汚れると水替えをすることで、冬眠中のカメにも関心は続くことを教師は意図した。</li> <li>・前日の気温との差を感じることで、寒暖と気温との関係に関心をもち始めている。</li> </ul>

表4 5歳児1学期の子どもの姿

幼児の言動 情緒的理解 科学的理解	環境構成と教師の援助	解 釈
<p>「今日は16度。」「天気はいいけど、カメはまだ冬眠から起きてきません。」と呟く。</p> <p>「先生、カメが出てきたよ。」と気付く。それを聞いていた周囲の子ども達は、動き出したカメを見に行く。</p> <p>G児は温度計の目盛りを指さし「20度になった。」「お水に入って、それから動き出した。」「4月まで眠っていた。」「干しエビあげたよ。」</p> <p>「今日は4月20日、今まで冬眠していた。」</p> <p>「4月20日にカメは起きてきた、でも以前も20度の日があった。」と疑問を感じる子どもの姿がある。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・冬眠中でも飼育ケース横の温度計を見ることで、気温が何度になったらカメが起きてくるのか、期待をもたせる。</li> <li>・カメの目覚めをともに喜び合う。</li> <li>・カメが冬眠していた期間について関心をもたせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・同じ20度でも気温でも冬眠から覚める条件が何かありそうだと、感じている幼児がいる。</li> </ul>

だったよ。」と友達に知らせたり、朝のクラス集会時にみんなに伝えたりするようになっていった。さらに子ども達は記録を続けるうちに、朝の気温と昼間の気温が異なることや、保育室前の気温と芝生広場の気温の違いに気付くようになった。すなわち、気温は時間や場所によって異なるのだということを理解するようになってきたのである。

11月頃になると、気温が下がるにつれ、カメの動

きが鈍くなってきた。そのことから子ども達はカメの動きと気温の変化の關係に気付き、冬眠が近いことを察した。そして、カメが冬眠する準備を子ども達で行った。子ども達は冬眠中も飼育ケースの中の飲み水をきれいにし、気温を記録し続けた。カメへの関心はカメの冬眠中も継続していった。

表5 5歳児2学期の子どもの姿

幼児の言動	情緒的理解 科学的理解	環境構成と教師の援助	解 釈
<p>登園直後温度計をみて「今日は18度。」と温度計の目盛りを読むようになってきた。「お弁当を食べるころには26度になっているよ。」と言う。さらに降園時の気温も調べる幼児の姿がみられる。</p> <p>S児が温度計をみて「17度。」と確かめ、続いて登園してきたM児に「今日は17度よ。」と伝えている。</p> <p>10月26日、園庭でお弁当を食べている時「葉っぱが落ちてきた。」「寒いね。」「半袖半ズボンでは寒いね、今度から長袖にしよう。」などと子ども達は話をしている。</p> <p>Y児「朝は18度だったよ。」とみんなに伝えている。それを聞いて子ども達は「お昼になっているから上がっているかな?」「風が冷たいから下がっているかな?」と考え合っている。</p> <p>食事を済ませて保育室前の温度計をみに行き、「21度。」と保育室前の気温を確かめた。しかし、「みんなでお弁当を食べた広場の気温は21度ではないかも知れない。」と感じる。</p> <p>毎朝温度計を見ながら記録を付けている。C児「6と7の間は何って書いたらいい?と教師に訊ねる。</p> <p>「5度と6度は5度の方が寒いよね。」と友達同士確かめ合う。(12月19日)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 気温を記録することを試みる。</li> <li>・ 気温の変化に興味をもつ。子ども達の姿を見守る。</li> <li>・ 温度計の横に紙を貼って、子どもたちと確認した気温を記す。</li> <li>・ 気温は朝と昼では変化することに気付かせる。そのため降園時の気温についても関心をもたせる。</li> <li>・ 「寒くなってきているね。」と共感し、「今、何度だろう?」と問いかける。</li> <li>・ 場所によっても気温が違うことを感じさせる。</li> <li>・ 必要に応じて表記の仕方等教える。</li> <li>・ 「点5、半分ということ、だから6と7の間は6点5、「6.5度」と教師は教える。(11月22日)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 朝と昼の気温の変化に気付く幼児がいる。</li> <li>・ 幼児は、戸外と室内の気温の違いを察知している。</li> <li>・ 気温は時間によっても場所によっても違うということを感じ始めている。(10月26日)</li> <li>・ 温度計の目盛りを厳密に読もうとしている。</li> <li>・ 温度計の数値が低いことが、より寒いということが分かる。</li> </ul>	

## 5歳児3学期

表6は5歳児3学期の子ども達の様子を示したものである。

この時期の子ども達は、冬眠中のカメの健康を心配しながらも今はまだ冬眠中であることを理解していた。筆者はこの頃室内にも温度計を掛けた。このことによって、子ども達は室内の暖かさを感じているが、気温が戸外より高いことを客観的に理解するようになった。温度計の見方については、目盛りと目盛りの間の読み方を筆者に訊ねるなど、より厳密に読み取ろうとする子ども達の姿も見られるようになった。また家庭で、テレビの天気予報に出てくる気温に関心をもつ子どもも現れてきた。そのことによって温度の表記についても理解し始める子どもの

姿も見られる。

## 4 考察

## (1) 情緒的理解と科学的理解

カメとかかわる体験を通して、カメの動きの変化から冬眠と気温との関係に気付く幼児の姿がみられた。このことは科学的理解の芽生えであると考えられる。4歳児の1学期は、カメにあいさつをしたり、名前を付けたりするなどの愛情表現的な行動が多く、いわば情緒的理解の状態にある。しかし、2学期からは、餌の量の変化や温度計の目盛りへの関心など科学的理解へと進んでいったと考えられる。

5歳児になって、子ども達はカメが冬眠から目覚めるということを実際に目前で体験した。この体験を通して生命の不思議さに感動したが、これは情緒

表6 5歳児3学期の子どもの姿

幼児の言動	情緒的理解 科学的理解	環境構成と教師の援助	解 釈
<p>教師と一緒にカメの飼育ケースの周りに段ボールで保温する。</p> <p>「ただいまとうみんちゅう」と段ボールに書く。</p> <p>カメの飼育ケース側の温度計で確認する。さらに室内の温度計でも確かめる。</p> <p>教師の質問に「14どかな、15どかな？」と答える</p> <p>毎日気温の記録を続けている。Q児が「C°」と自分で書いた。(1月15日)</p> <p>教師の発問に「天気予報で見たから。」と答えた。次の日「やっぱり だった。」と報告する。</p> <p>気温の表記について自分で確かめる姿がみられた。</p> <p>4.1と記す。(2月18日) 6.1と記す。(2月28日) 3.4と記す。(3月4日)</p>	<p>・室内と戸外の気温の違いについて気付かせるために、室内にも温度計を掛ける。</p> <p>・保育室内の気温に気付かせるために「お部屋の気温は何度かな？」と質問する。</p> <p>・また別の日部屋の気温を訊ねる</p> <p>・教師は正しい表記に気付かせたいと考え、「C°? って書いたのは何ですか？」と尋ねる。Q児の答えにはなかったかな？」と問う。</p>	<p>・戸外の気温よりも室内の方が高く暖かいことが数値より客観的に分かる。</p> <p>・おおよその気温が体感できるようである。</p> <p>・園での体験が家庭でテレビの天気予報に興味をもってみることにつながっている。</p> <p>・1度の目盛り間を「テン5」と読んでいたが、より厳密に読もうとしている姿がみられる。</p>	

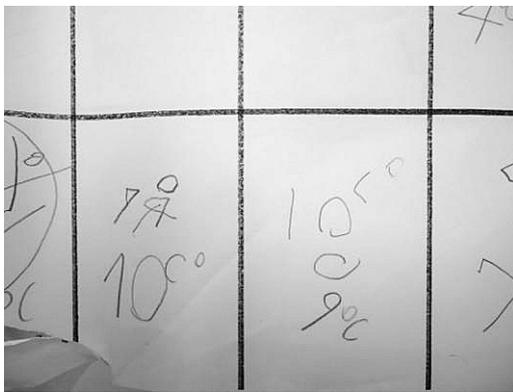


写真6 気温の表記をC°から に訂正

的理解の深まりであると考えられる。

表1から表6のなかでは、幼児の言動を情緒的理解と科学的理解という視点で捉えようとしたが、実際には必ずしも情緒的理解から科学的理解へと単に発展していくのではなく、カメに対する情緒的理解がともなわなければ科学的理解も深まらないことが分かる。すなわちカメとの出会いは、最初情緒的理解から出発したものの「知りたい」という欲求が高まり、それがさらにカメの行動の変化への好奇心

を強め、科学的理解へつながっていったものと思われる。

本実践本研究では、子ども達とカメの関係は、単に飼育動物の世話をするという体験の域を超え、飼育動物と環境との関係を捉えるものとなった。その背景として次の点が考えられる。4歳児から5歳児までの年度を越えた2年間で、春夏秋冬を通して季節によるカメの生活の変化を学んだこと。教師がカメの飼育ケースの横に温度計を掛けたことによって、カメの生態と気温との関係に興味をもつ環境構成であったこと。カメの飼育が当番制やグループの役割として義務付けられたものではなく、幼児の思いに委ね、幼児自らが学習していくことをめざしたものであったこと。幼児の気付きを受け止め、教師が学級の集会などで、全体に伝え合うことで、カメに関する情報を共有できたこと。

## (2) 環境としての温度計

カメの飼育ケースを中心にその環境としての温度計は、当初プール遊びが可能であるか否かを知る手

掛かりとして用いるためのものであった。しかし、カメの生態と関連付けることで、カメが冬眠する気温、冬眠から目覚める気温を幼児は意識していった。特にカメの目覚めについては、その時期とその瞬間の感動とともに、気温を自分達で数値として捉え、さらに同じ気温であってもカメが目覚めるには他の条件が関与することも感じている。温度計に関して言えば、単に見ることから数値として捉えることへと進んでいった。そしてその数値がカメの生態とつながることを実感し、自分達の生活についても寒暖と結び付けるようになっていった。

最後に、このような身近な事象を教師が積極的にとらえ、率直に正面から取り組んでいくことは、子ども達の学びの深化に非常に大事である。この実践は、最初から計画的に行われたものではない。子ども

もがカメの飼育ケースを割るという出来事に対する筆者の反省から出発したものである。また、温度計を掛けた場所がカメの飼育ケースの側というのも意図的なものではなかった。偶然が幸いしたのであるが、今後は計画的に取り組むことが課題である。

#### 参考引用文献

- ・福岡教育大学附属幼稚園研究紀要 1999
- ・文部科学省「幼稚園における道徳性の芽生えを培うための事例集」2005
- ・近藤卓「いのちの教育の理論と実践」金子書房 2007
- ・J. D. ハーレン・M. S リブキン「8歳までに経験しておきたい科学」北大路書房 2007
- ・前田志津子・清水陽子「いのちの理解を培う保育方法の研究」日本教育方法学会第44回大会 2008
- ・文部科学省「幼稚園教育要領」教育出版 2009